

時代の先へ 女性経営者奮闘

京都市

地方の元気前線

京都・八坂神社にほど近い乾物の老舗「京山城屋」で、先ごろ、「おんなの為の調味料」という名のユニークな商品が売り出された。

調味料といっても、塩やコシヨウではなく、「京いりごま」「七味ふりかけ」「あらびききな粉」の3種類。いずれも京山城屋の百有余年の歴史を、3代にわたって築き上げた女性経営者の自信作である。

「京いりごまは祖母の悦子、七味ふりかけは母の千奈美、そして、あらびききな粉は私が自信を持ってお勧めする商品です。そのこだわりをもっと身近に感じてもらいたくて、調味料として売り出しました」と店長の真田寛子さん(27)。

活躍する。

京山城屋の歴史は109年前の1904年、東本願寺から「山城屋」の屋号を授かったことに始まる。以来、日本の食卓に欠かせない乾物を扱い、一時期、煮干し問屋として隆盛をきわめたが、第二次世界大戦で財産のほとんどを失った。

しかし、寛子さんの祖母・真田悦子さん(79)がスーパーマーケットの精開けに注目し、周囲の反対を押し切ってスーパー専門問屋として新たなビジネスに乗り出した。時代の流れに乗って事業は拡大し、年商30億円にまで成長した。

時は平成に変わり、ここで問屋から乾物メーカーへの業態変更を決意する。今度は寛子さんの母・真田千奈美さん(55)が

手懸に乾物料理を作る「京のおばんざい」シリーズ。「ごまあえの素」などすべてできる商品で、働く女性にぴったりと合い、全国の大手スーパーが販売。社員は100人を超える規模になった。

寛子さんが店長を務める京山城屋は2004年、創業100年を迎えた山城屋が「次の百年」を見越してつくった「伝統の味の発信地」、つまりアソチナシヨツプである。

寛子さんは京山城屋だけでなく、2軒隣にある「きなこ家」の店長も兼任している。きなこ家では大豆で作ったきなこを使って、和菓子など多彩な商品を展開。また、カフェも併設しており観光客に人気の店でもある。

京山城屋もきなこ家も、女性ならではのきめ細やかな工夫が随所に感じられる店だ。



109年の歴史を築き上げた3人の女性経営者(左から千奈美さん、悦子さん、寛子さん)。「おんなの為の調味料」はそれぞれの自信作だ

今回発売した「おんなの為の調味料」は、時代に敏感な女性3代経営者のこだわりが詰まった新しい看板商品。発売して1カ月がたち、手応えもそこそこ感じられるようになってきたという。「山城屋を支えてきた3人の

女性の最大の武器は「時代を先取りする目」です。乾物を調味料として売ることも、きつとこれから時代に受け入れられると思います」と寛子さん。今後の展開が楽しみです。

(TMオプティクス社長 殿村美樹) 毎月第2、4金曜日に掲載

池田泉州HDDと東海東京FH共同出資

証券子会社 9月から営業

池田泉州ホールディングスが、東海東京フイナンシャル・ホールディングスと共同出資で運営する証券会社「池田泉州T

出資比率は池田泉州が60%、東海東京が40%となり、社長には池田泉州銀行の元常務執行役員、北村康男氏が就く。東海東京証券が神戸支店(神戸市中央区)の事業、顧客基盤を新会社に譲渡。池田泉州銀行本店営業部と堺支店を合わせた

3カ所が営業拠点になる。本社は同行本店に置き、池田泉州から29人、東海東京から49人が出向する。2017年3月期に営業収益(売上高)15億円の達成と営業黒字化を目指す。北村氏は「以前から外国債などへの顧客ニーズが高い。グル

ープとして資産運用の機能、提案力を高めたい」と述べた。富裕層が多い阪神間を重点地域と位置づけており、東海東京神戸支店から引き継ぐ約5000口座と合わせ、営業開始から1年間で口座数を1万まで増やす方針だ。

人前式「時空の広場」でいかが

大阪エナーショョンシティはホテルグランシア大阪の開業30周年を記念し、5階の「時空の広場」で結婚式を挙げるカップル2組を募集する。挙式は今年11月4日に、参列者を証人とする「人前結婚式」スタイルで行う。参加者は30人で式と披露宴

を88万円で購入する。「時空の広場」での結婚式は、ステージョンシティが「幸せの場所」として広く認知されるようにと、昨年6月に1組を公募し開催した。その後、挙式を希望する声が多かったため、今年6月には公募で選ばれた2



を実施する。JR大阪駅長が立会人として出席し、カップルとともに結婚誓約書への署名を行う。終了後はホテルグランシア大阪20階の宴会場で、洋食コース料理の披露宴を執り行う。年齢や既婚・未婚は不問だが、結婚式を挙げたことがない人が対象で、応募は8月31日まで。問い合わせはグランシア大阪 ☎06・6347・1433まで。

中小企業活性化のツールに「関西IT百撰」

NPO法人・IT百撰 山岡 喜紹理事長に聞く

IT(情報技術)を経営に活用し、業績を伸ばしている中小企業を表彰する「関西IT百撰」(主催・関西サイエンス・フォーラム)。13回目を迎える今年度で、受賞企業は100社を超える見込みだ。共催団体で表彰の審査・運営を担当するNPO法人・IT百撰フドバイザー・クラフ(大阪市北区)の山岡喜紹理事長に表彰の意義や中小企業の活性化などを聞いた。



「2001年度に関西の主要経済5団体の協賛事業として始まっ

た。当時の森喜朗内閣で『e-Japan戦略』も始まり、ITは時代のキーワードだった。ITの重要性を関西の企業に認識してもらおうには何か必要か。IT

を導入して元気になっている企業を表彰したらどうか、とスタートした」

企業が導入の参考になるような企業を表彰している」

業でも利益を上げているケースもある」

「最優秀賞、優秀賞など、基本的に毎回9社を表彰してきた。なかには複数回受賞した企業もある。IT活用によって業績を伸ばしている企業は、まだまだたくさんある。今月から13年度の募集が始まった。これからもすばらしい企業を発掘していきたい」